

## 中国中世の辟邪と占書

### On charm against evil signs and book of divination in the medieval China

佐々木聡 (Satoshi SASAKI), 博士課程後期 3 年, 文学研究科歴史科学専攻比較文化史学専攻分野, 磯部彰, [satobo3@hotmail.com](mailto:satobo3@hotmail.com) (415 院生室)

キーワード 悪鬼・精怪、辟邪、占書、物類相関、『白沢精怪図』

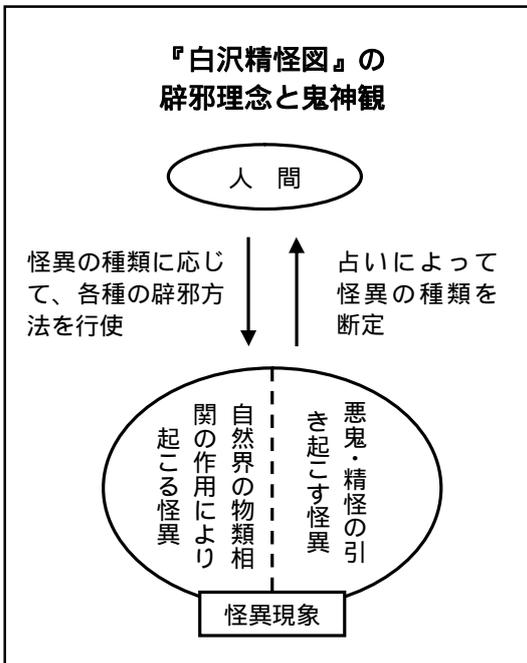
#### 〔要旨〕

本発表では、唐代(618-907)初期に民間で書かれた俗書『白沢精怪図』を材料として、唐以前の俗信の中に見える鬼神観(神々・祖霊・妖怪に対する観念)の特徴を紹介する。『白沢精怪図』は、悪鬼や不祥を却けること(辟邪)を目的とした書であり、そこには悪鬼・精怪についての豊富な記述が見える一方で、一貫した体系的鬼神観を抽出することもでき、中世の俗信の在り方を窺い知る貴重な資料と言える。

本書の中で、悪鬼・精怪は、怪異を引き起こし、人間に厄災をもたらす存在として語られる。その一方で、災厄の前兆として起こる怪異現象は、必ずしも精怪・悪鬼により引き起こされる訳ではない。自然界の天変地異や動植物の異常行動など、一見、悪鬼・精怪の仕業と見分けのつかない怪異現象が、実は何らかの厄災・凶事の前兆という可能性もあった。このような観念を中国史では「物類相関」と呼ぶ。物類相関を背景として当時を生きる人々にとっては、実生活の中で遭遇する怪異現象は、それを読み解き、厄災から身を守るための方策を模索することが不可欠であった。そういった需要から当時作成されたのが、夥しい数の占書である。その中には勅命による編纂の占書もあることから分かるように、物類相関



疫病をまき散らす悪鬼「野童游光」。古くは、後漢時代(2c)の『風俗通義』に書かれた俗説の中に見える。図は唐写本『白沢精怪図』。



は、当時の国家理念から民間の俗信まで広く浸透した観念であった。

『白沢精怪図』もまたこのような「物類相関」の観念により書かれた占書が原形と思われる。それに悪鬼を却ける辟邪書の理念を下敷きとして、俗信における需要から各種の辟邪方法が加筆されて出来上がったのが、現存する敦煌本『白沢精怪図』であると報告者は考えている。さらに、その辟邪方法には、漢代(前206-8,25-220)以前まで溯る呪術も見えている。このような辟邪書の性質を持つ占書は、唐代以降の伝世文献には全く見えず、漢代の目録のみその存在が確認できる。つまり、民間では漢代以前の古い形式の占書が、それが失われた唐代以降も命脈を保っており、そこから、道教・仏教などもまた一線を描く信仰史の流れが浮かび上がってくるのである。